巻頭言

地域貢献活動への参加を！

酒井 太郎（さかい たろう）
当協会理事
（霞ヶ関南病院 リハビリテーション部 副部長　作業療法士）

この時期はいずれの施設も診療報酬改定への対応のため、さまざまな議論が活発なところであろう。

今回、回リハ病棟入院料1、2において「地域貢献活動に参加することが望ましいこととする」との努力義務が明示された。これまで各市町村では、地域における介護予防の取り組み強化を目的とした各種の地域リハビリテーション活動支援事業が推進されてきた。当院でも、医師会と連携し、介護予防事業・地域ケア会議への参加、住民運営の「通いの場」へのリハビリテーション専門職の関与などを行ってきた。そのような中、こうした院外、地域での支援活動の主たる担い手はベテランのスタッフが多いという現状があった。

当院には新規採用面接の際、「地域リハビリテーションをやりたい！」と前のめりで入職してくるスタッフも少なくない。

そこで、2023年度より、地域貢献活動を人材育成の一部と捉（とら）え、部内教育におけるキャリアラダーに組み込み、若手・ベテランを問わず、どのスタッフも地域での支援活動を段階的に経験できるよう体制を整えた。

こうして若手・ベテランを交えた形で新たに始まった地域貢献活動の初年度は、普段の業務とは異なる部分が多い点をはじめ、院外のスタッフとのやりとりや、活動に向けた準備などの点で、多くのサポートを必要としたスタッフがいたことも事実ではある。

そういった点がありながらも一方では、院外活動を終え、帰ってきたスタッフは充実感のある表情をしている印象が強い。事実、年度終わりに地域貢献活動に参加したスタッフ59名にアンケートを実施したところ、「（院外活動が院内での）日常業務にも活かせた」との回答が8割を超えた。嬉しい結果である。

当院ではさまざまな地域貢献活動を行っている。その1つひとつに対して事前の準備や心構えなど、若手のスタッフであっても地域支援の役割を果たせるような教育やサポート体制を整備しながら、若手もベテランも参加する形での地域貢献活動を今後も継続していきたいと考えている。

入院でのリハビリテーションを経て地域生活に再び戻るプロセスの支援という役割を担っている回リハ病棟においては、域内のネットワーク構築と地域情報の収集・活用は不可欠といえる。退院前後の居宅への訪問や退院前のサービス担当者会議の開催など患者の暮らす地域と接点をもつ取り組みはすでに多くの施設で行われていると思う。

地域貢献活動に参加したスタッフ各人の経験の蓄積が、本業である回リハ病棟における入院リハビリテーションや退院支援のさらなる充実、バージョンアップにつながっていくと理想的である。今回の改定を機に、回リハ病棟のスタッフがより積極的に地域に出て行き、院外での経験をもって、院内でのかかわりに活かす気運が高まることを期待したい。

いきいきとその人らしく生活が継続できるよう、共に支え合う地域ネットワークの中に病院、回リハ病棟がしっかりと存在し、その地域ならではのニーズにも柔軟に対応しながら、地域とともに発展していきたい。